# 進化し続ける音楽表現を目指して
## ― 竹筒楽器での音楽づくりを通して ―

宮城県大崎市立川渡小学校
教　諭　　早坂　英里子

### 1　はじめに

小学校の音楽科では，歌唱，器楽，音楽づくり，鑑賞の４つの内容が示されており，どの学年でも４つの内容をすべて学習することになっている。この内，歌唱や器楽の学習には多くの時間が割かれているが，鑑賞や音楽づくりの授業は苦手であると話す教師も多く，何をどのように指導してよいか分からない，という話もよく聞かれる。また新型コロナウイルス感染症の影響で歌唱や器楽の学習を行うことが難しかった期間には，音楽の授業のほとんどは鑑賞の学習を行っていたという話も聞いた。

一般的に「音楽」というと，楽譜をもとに演奏したり音楽家によって再現された音楽を鑑賞したりする再現芸術としての印象が強い。一方，もともとあるものを再現するのではなく，自分たちにとって価値のある音楽を創り出す喜びを感じられるのが音楽づくりの学習なのではないかと音楽づくりの指導をするたびに実感している。

学習指導要領解説音楽編によると，音楽科の目標として，「音楽活動の楽しさを体験することを通して，音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに，音楽に親しむ態度を養い，豊かな情操を培う」とある。上手に歌ったり演奏したりできる技術はあるに越したことはないが，それ以上に生涯にわたって音楽を楽しみ親しむ態度を養っていくことが求められている。そこで，音楽づくりの学習を通して，自分たちにとって価値のある音楽を創り出すとともに，その授業内での学びに留まらず，その後もその音楽を大切にしながら育み続け，ひいては生涯にわたって音楽を愛好するような児童を育成したいと考え本主題を設定した。

### 2　研究の目標

自分たちにとって価値のある音楽を創り出す楽しさや喜びを知り，さらに進化させていこうとする子供たちを育てるための音楽づくりの授業実践のあり方を考える。

### 3　研究の方法

（1）身近にある素材を生かして自分の楽器をつくる
（2）即興での音楽づくり
（3）学習発表会に向けた音楽づくり
（4）地域の文化祭での発表
（5）宿泊学習での演奏

### 4　研究の内容

（1）身近にある素材を生かして自分の楽器をつくる
（第４学年音楽科，総合的な学習の時間）

自分たちにとっての価値のある音楽をつくるにあたり，楽器を手作りするところから始めることにした。楽器というと既成のもので，お金を出して買うものというイメージがある。鍵盤ハーモニカやリコーダーなどは自分のものを持っているが，クラス全員の楽器が同じものであり，子供たちにとってはそれほど愛着を持って扱っている印象はない。そこで，身近な素材を生かして自分だけの楽器＝マイ楽器を自分で作って使うことで，楽器や音楽に対する愛着が増すのではないかと考えた。

令和４年９月，学区内の竹藪所有者の方に許可をいただき，クラス全員で竹を伐採しに出掛けた。切り出した竹は，近くの飲食店の敷地をお借りし，子供たち自身の手で運搬して楽器作りを行った。

大学生ボランティアの協力も得ながら，必要な長さの竹をのこぎりで切り出し，節を抜いたり切り口をやすりで削ったりして自分の手で自分の楽器を仕上げた。

この楽器は，長さの違う竹（一方のみ節を残す）で音階を作り，地面に打ち付けて演奏をするフィリピンの民

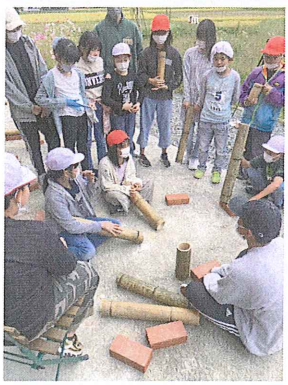
族楽器「トガトン」を参考にして作った楽器である。子供たちは自分の好みの太さの竹を自分の好きな長さに切ってマイ楽器を作った。簡単につくれる割には竹のとても良い響きのする楽器である。竹の太さや長さによって音の音色や高さが変わるため，自分だけの音を作り出し，楽器への愛着も深めていた。

（2）即興での音楽づくり

全員の楽器ができたところでグループになり，その場で即興的な音楽表現，音楽づくりを行った。

【　即興的な音楽表現　】

①グループで円になり，一人1音ずつ音を鳴らして音をリレーする
②グループで円になり一人1音ずつ，好きな間合いで音を鳴らして音をリレーする
③グループで円になり出来るだけ素早く音を鳴らして音をリレーする
④教師の出す音を模倣する（全員一斉に）
　教師→児童→教師→児童…
⑤グループのリーダーの出す音を模倣する
　リーダー→メンバー→リーダー→メンバー…
⑥拍にのって順番に，一人が鳴らした音を模倣しながらリレーする
　一人→みんな→一人→みんな→一人→みんな…



上記のような即興的な音楽表現を体験した後，グループごとに約１５分で音楽づくりを行った。即興で音楽づくりを行った経験はほとんどなかったが，直前に体験した音楽表現を活かし，一人が拍を打ち，それに合わせて他の人がリズムを打ってリレーをしていくなどの音楽が生まれた。また，竹筒による音高の違いを活かし，並ぶ順番を変えるなどの工夫をする姿も見られた。さらに，音楽の終え方の工夫として，一人ずつ抜けていく，みんなでそろえて一音を鳴らす，だんだん小さくするなど，音楽の学習としての学びの要素にも自分たちで気付いて工夫する姿が見られた。それぞれのグループで考えた音楽を発表し聴き合うと，どのグループも１５分間で考えたとは思えないような音楽をつくっており，お互いの音楽の良さを認めて拍手を送り合っていた。

（3）学習発表会に向けた音楽づくり

10月末の学習発表会での演目の一つとして，手作りの竹筒による自作曲の発表を行うことにした。竹筒楽器を作った日に行った即興での音楽づくりでの発想をもとに，構成的にまとまりを意識した音楽づくりを行った。前回はグループごとに音楽をつくったが今回はクラス全員の１６名で一つの音楽をつくった。

初めは自分たちで音楽をつくれるのだろうか，という不安が子供たちにも教師にもあったが，「一人が拍を打っている間に別の人が間に入る（餅つきのように）」「４拍分を一人ずつ自由にリズムを打って，それを重ねながらリレーしていく」「何人かのグループでリズムをつくって，それを他の人が真似していく」などのアイディアが出され，それをもとに一つ一つ全員で音を出して確かめながらアイディアを形にしていった。

構成的な音楽づくりといっても，例えば一人一人がリズムを打ってそれを全員でリレーしていくアイディアでは，一人一人が打つリズムは固定していないため練習するたびにリズムが変わる。構成的な音楽の中の即興的な要素である。したがって子供たちは自然にお互いのリズムを聴き合うようになり，友達がいつもとは違ったリズミカルなリズムで打った時には思わず「おお！」と歓声が上がることもあった。例え今日のリズムがうまくいかなかったとしても，次回演奏する際にもう一度挑戦する機会があり，そのような試行錯誤の中で，毎回果敢に違うリズムに挑戦する子供もいれば，だんだんと自分らしいリズムを見いだして自分の演奏するリズムを固定する子供もいた。

曲の終わり方は，リーダーの児童が竹筒をレンガに打ち付け，そのまま竹筒を頭上まで高く持ち上げる動きを２回繰り返し，３回目に全員で一音強く音を鳴らして終わることに決めた。そうすることで，リーダーがどこで曲を終わらせるかを一人一人が音を動作から判断する必要があり，全員がリーダーの動きに気を配りながら演奏することができた。練習中はリーダーの動きが分かりにくかったり，リーダーの動きを見ていなかったり，見逃したりして終わりがなかなか揃わないことも多かったが，そんな中でぴったりと音が揃っ

て静寂が訪れた時，子供たちは「揃う美しさ」を感じ取ることができた。

学習発表会当日は，多少の緊張もあり，リズムが崩れたり揃わなかったりした部分もあったが，同じ曲を演奏しても二度と同じ曲にはならない一回限りの音楽をその時その場で紡ぎ出すことができて満足していた。

竹筒は自然の素材ゆえに，練習中に割れてしまったり，乾燥して自然に割れてしまったりしたものもあった。あらかじめ予備の竹筒を何本か用意しておいたが，「私は高音がいい。高音でないと合わないリズムだから」というように，マイ楽器に愛着をもち，マイ楽器の音色に合ったリズムを考えるなど，音楽的な要素を生かした表現の工夫を行う姿も見られた。

（4）地域の文化祭での発表

学習発表会のすぐ後，11月上旬に地域の文化祭でも竹筒楽器の音楽を演奏する機会があった。曲は同じ曲であったが前述の通り，曲の大まかな部分は構成的に決まっているが，細かなリズムや曲の終わり方などは個人やリーダーの感覚次第で変化する。ある意味で即興的な表現と言っても過言ではない。いつもと違う会場で自分の知らない地域の方も観客としている場であったため，子供たちは多少緊張をしていた。しかし，練習通り演奏を終えることができた。

終演後に知らない観客の方が「ちょっと曲が長すぎた。もう少し短くてもよかった。」と感想を漏らしていたことを知った。この時に考えたことは，聴衆のために演奏する音楽と自分たちが楽しんで自分たちのために演奏する音楽との違いである。

竹筒を実際に鳴らしてみて分かることであるが，素朴な音色がとても心地よく，簡単に鳴らせることから，大人であっても誰かに止められるまでずっと鳴らしていたいと感じるような楽器，音楽なのである。また，誰かと一緒に鳴らしてセッションすると，これもまた一人で鳴らしている時には感じられない楽しさがある。

子供たちはステージで観客のために演奏をしてはいたが，その時は既に，観客のための演奏というよりは，自分たちのための演奏になっていたのではないだろうか。演奏するごとに曲が進化し，その心地よさゆえにどんどん音楽が長くなり，終わりを迎えるのが惜しくなったのではないだろうか。その場の音楽を楽しむことで曲がどんどん「進化」していったのだと考える。

曲をいつ終わらせるかのタイミングはリーダーの感覚に任せられているため，聴いている側からすれば「そろそろ終わりにしてもよいのでは」と感じられたのかもしれないが，演奏する側は「もっとずっと演奏していたい」という思いがあったのではではないだろうか。実際演奏する姿を見ていても誰一人集中を切らすことなく演奏をしていたし，終演後もとても満足そうな顔をしていた。ここでの演奏を通して，自分たちがつくった楽譜があるわけではない音楽は自分たちにとっての価値のある音楽になり，自分たちのために奏でられ，まだまだ進化する可能性のある音楽になったのだと感じられた。

（5）宿泊学習での演奏

令和５年度，児童は５年生に進級し，６月に花山青少年自然の家で宿泊学習を行った。キャンプファイヤーの際に昨年度作製した子供たちのたちの竹筒マイ楽器を全員分持参して旧担任としての立場で参加してきた。竹は前年度よりも乾燥し，さらに良い音が出るようになっていた。子供たちは「懐かしい」「まだ取って

あったのですか」「私の竹あるかな」と言いながら嬉しそうに竹筒を手にした。そして思い思いにリズムを刻み始めた。

学習発表会のときにつくった曲の構成を確認した後，キャンプファイヤー場で半円になって演奏を試みた。学習発表会のときの並びとは違う並びであったし，リハーサルもなく一発勝負での演奏であったが，一人ずつ順番にリズムを刻んで重ねていき，最後にはリーダーの合図に合わせて演奏を終えることができた。

持ち運び可能な楽器だったので野外に持ち運べたことと楽譜がなくても構成と合図をもとに演奏する音楽だったこともあり，事前の練習や告知すらなく，約半年のブランクがあっても演奏できるということが確かめられた。また，竹筒の音色は野外で演奏するのにふさわしい自然の音であり，竹筒の下に置いたレンガに打ち付けることで野外でも十分に響く演奏を行うことができた。その後もしばらく竹筒でのセッションは続き，そのままキャンプファイヤーへと活動が移っていった。

学習発表会，地域の文化祭，キャンプファイヤーとどれも二度と同じ演奏はできないその時限りの音楽を奏でることができ，その度ごとに子供たちのつくった音楽は子供たちの手によって進化していったのである。

## 5　研究の成果

実践の初めからここまでの展開を想定していたわけではなかったが，子供たちがつくった音楽が思った以上に進化を続けていることがなによりの成果である。その上で，本実践で得られた成果として，進化する音楽表現を引き出す音楽づくりを目指す上で大切にしたいポイントをまとめる。

（1）記譜せずに音楽をつくることのよさ

本実践ではつくった音楽を楽譜として記録せずに実践を行った。構成的に音楽をつくる際には記譜することで頭の中を整理しながら音楽をつくれる良さがある。しかし記譜しなかったことで楽譜に縛られることなく，ここまで音楽が進化したのだと考えられる。

音楽の構成として，演奏する内容はあらかじめ決めていたが，その中での自由度があるため毎回違うリズムで演奏してみたり，前の人のリズムを受けて自分のリズムを変えたりする即興性があり，そのことによって音楽が進歩したと考えられる。また，構成や合図の確認さえすれば，いつでもどこでも演奏できるというよさがある。だからこそお互いの音を注意深く聴く必要性が生まれ，相手の表現を受けて自分の表現を考えたり，拍を共有して息を合わせたりする必然性も高まり，そのことによって息を合わせて演奏する音楽的な技能も高まったと考えられる。

（2）自分たちが楽しむための音楽への昇華

学校教育の中では，演奏というと聴衆に聴いてもらうための発表という側面が強い。もちろんそのような経験はとても大切である。しかし本実践における地域の文化祭での演奏は，聴衆のための演奏というより，その場で自分たちが楽しむために音楽を奏でているという要素が強かった。誰かにとって価値のあるものをつくり出すだけでなく，「自分（たち）にとっての価値」をつくり出せたことは大きな成果であった。クラス全員と一体になり，言葉を介せずに音だけでコミュニケーションを取り合えるという経験は，生涯にわたって音楽に親しむ態度を育むうえで大きな経験になったと考えられる。

（3）身近にある素材を生かしたマイ楽器作り

自分たちの身近にあるものから楽器をつくり出した経験や，身近なものが楽器になるという発見，楽器も音楽も自らの手でつくり出せるという経験は今後の音楽の学習，音楽づくりの学習に生きてくるであろう。また，音楽に留まらず，これから先を生きていく上でも「自分たちにとっての価値は自分たちでつくり出せばいい」という態度として生かされていくものと考える。また，マイ楽器を自分でつくることで，自分の楽器や自分の楽器が出す音の音色に愛着をもつことにつながることが明らかとなった。

## 6　今後の課題

学習発表会，地域の文化祭，キャンプファイヤーと続けてきたからこそ，子供たちが来年６年生になった時にも卒業に関する行事や閉校に当たっての行事等の際に更に進化した竹筒の音楽を演奏してもらいたい。

竹筒の音楽づくりで学んだことは他の音楽づくりの学習を行う際に生かせる学びである。学んだことをもとに，これからも自分にとって価値のある音楽をつくっていってほしい。

そして，学校での音楽の学習としてだけでなく，生涯にわたって音楽を愛好する気持ちをもち続け音楽と関わっていくような子供たちになってほしいと願うと同時に，そのような子供たちを育てるための指導方法について，教師自身も学び続けていくことが大切だと感じている。